

CAPNA

キャプナニュースレター51号

教育再生会議のニュースが報道されるたびに、「こんな古くさい議論をして、子どもたちを守るの？」と不安になるこのごろです。今を生きる子どもたちの心に寄り添って、代弁者として声を上げていく必要があります。今回のニュースレターは、ちょっと趣向を変えて、子どもの心に触れる文学作品を特集します。

Vol. 51

皆様から優しさをいただきました

～幸せのイエローレシートキャンペーンのご報告～

イオングループの「幸せのイエローレシートキャンペーン」で、CAPNAは、2006年度下半期分として11店から総額151,600円分の助成をいただきました。毎月11日の「イオンデー」に地域の市民団体の名前と活動内容が書かれた投函BOXが並び、買い物客の方たちが黄色のレシートを入れていただくと、その1%が団体に助成される市民活動応援のキャンペーンです。

写真は、4月11日に名古屋・守山店で開かれた贈呈式の模様です。

幸せのイエローレシート事業でCAPNAが支援をさせていただいて3年目になります。これからも、毎月11日は、CAPNAのボックスレシートを。

皆様のご協力をよろしくお願いたします。



<各店舗より下記助成金額にて次の品物をいただきました> (順不同)

熱田店 (15,900円) ペットボトルお茶 木曾川店 (16,200円) 急須、湯のみ、カップなど
瀬戸みずの店 (8,200円) タオルなど 高橋店 (23,200円) ペットボトルお茶
豊田店 (7,200円) 紅茶、ココア、ミルク、シュガーなど 南陽店 (1,900円) コピー用紙
扶桑店 (13,900円) 蛍光灯(長、丸) 守山店 (10,400円) ペットボトルお茶
ワンダーシティー店 (14,500円) ゴミ袋、スリッパ、電球、乾電池、水切りバックなど
ナゴヤドーム前店 (32,000円) 掃除機紙バック トイレ用クリーナー 芳香剤など
弥富(マックスバリュ)店 (8,200円) お茶葉、紅茶、乾電池、水切りネット

ご寄付

次の皆様からご寄付をいただきました。お礼申し上げます。

(3月-4月分、順不同、敬称略)

- 【団体】名古屋市熱田区青年の家ヤングフェスティバル実行委員会、名古屋名城ロータアクトクラブ、三井住友海上火災保険(株)、三井住友海上火災保険(株)スマイルハートクラブ
- 【個人】五十嵐ベティ、嶋康子、榎本和、後藤宗理、平良亮子、向山富雄、北村栄、岡本洋子、宮崎律子、藤井直行、水無瀬量端、上村順次、谷口紀美江、高木佳子、朝見巴幸、服部恵子、国森佳子、谷田悟、山口志津代、鳥居かおり、曾根富美子、服部高子、白石淑江、萬屋育子、矢満田篤二、井上薫、井上直美、ほか匿名6名

CAPNAニュースレター51号 (隔月刊35号)

2007年5月18日発行

発行 特定非営利活動法人 子どもの虐待防止ネットワーク・あいち

編集 CAPNA事務局広報チーム

事務局 〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-4-404 TEL052(232)2880、FAX052(232)2882

読もう！知ろう！子どもの心

虐待、DV、少子化、遊び空間の喪失など、子どもを取り巻く社会は深刻な問題ばかりですが、子どもたちの心を理解し、応援しようとする文学作品も、かつてない充実ぶりを見せています。読書離れが著しい大人たちも、こうした作品に接する時間を持ちたいものです。子どもを知るための読書ガイドをお届けします。
(安藤 明夫)

読み出したら止まらない あさのあつこ

子どもたちの間で大人気のあさのあつこは、ぜひ読んでおきたい作家です。

映画にもなった「バッテリー」(全6巻)は、岡山県の田舎町に引っ越してきた天才投手・原田巧と、捕手永倉豪を軸にした物語。いわゆる熱血スポーツドラマではなく、試合の場面はごく一部しか登場しません。中学校入学前からの1年間、バッテリーの成長や周囲の仲間たち、ライバルたちの姿を描いています。自分の信念を絶対に曲げない巧、大きな父性を感じさせる豪。巧の球に魅入られたスラッガー門脇、くせ者の端垣…大人たちの影は薄く、ハラハラ、ワクワクの子どもたちの世界が繰り広げられます。



新作「THE MANZAI」(現在、3巻まで)も中学生たちが主人公。不登校経験のある転校生瀬田歩が、サッカー部の秋本貴史から「一緒に漫才をやろう」と誘われ、そこから思いがけない日々が始まります。

仲間たちが集まり、大人の干渉をはねのけて自分たちのフェスティバルを築いていく中に、恋があり、友情があり、成長があります。まだまだ先が長そうなシリーズです。

あさのあつこの魅力は、男の子の気持ちをとことん掘り下げ、平易な言葉で伝えていくこと。子どもの行動力、問題解決力を見下さない姿勢が、子どもたちの共感を呼んでいるようです。

せつなく美しい佐藤多佳子の世界



昨年、大きな話題を呼んだ「瞬間の風になれ」は、惜しくも直木賞受賞は逃しましたが、本年度の本屋大賞に選ばれました。

舞台は、高校の陸上部。主人公・神谷新二と幼なじみの一ノ瀬連の二人が、短距離走の世界で才能を開花させていくお話ですが、その

描写がため息が出るほど美しい。100M走のスタートラインに立ったとき、ただ一本、光って見える赤い道。自分の道をただひたすらにまっすぐ走る。体を切る風。その先に得たものは。

「ただ、速く走れただけじゃない。ただ、勝っただけじゃない。すごく、すごく大きなものを手に入れたと思うけれど、それが何なのか、言葉にならなかった。いいんだ、言葉にならなくても。ずっと忘れずにいよう」。これが物語のゴールです。

佐藤多佳子の名は児童文学の世界ではかなり以前から知られていました。一枚のイラストをモチーフに、みもりと悟のせつない思いを描いた「黄色い目の魚」、読んでいるだけでピアノの旋律が聞こえてきそうな「サマータイム」も、お勧めです。

リアルな日常描写が魅力 瀬尾まいこ

現役の中学教師でもある瀬尾まいこ。子どもたちの描写は、リアルそのものです。「温室デイズ」は、集団いじめの標的になる二人の女の子が主人公ですが、不思議なほど暗さはありません。



「教室に紙飛行機が飛びはじめる。始まりの合図だ。もうすぐ崩れだす。でも、教師はまだ気づかない」。こんな観察眼を持ったヒロインたちは、大人たちよりずっと冷静に現実を見つめ、不登校になったりしても決して心のピンチには陥って

いません。うるたえる親を励ましたり、非行少年の支援をしたり。そして将来のことも、何気なく考えています。子どもたちを簡単にレッテル張りしてはいけない、という作者の思いが伝わってきます。

男の作家たちもがんばっています

子どもを描くのが得意な現代の男性作家は、石田衣良、萩原浩、重松清が「御三家」だと思います。

石田衣良の直木賞受賞作「4TEEN」(フォーティーン)は、東京・月島に住む中学校2年生の4人の男の子たちの物語。今を生きる子ども



たちが、大人の入り口でどんなふうに関性に出会うのか、病氣や死をどう受け止めるのか、共感を持って読めます。神戸の小学生連続殺傷事件をモチーフにした「うつくしい子ども」も、子どもの心に潜む悪意、苦境にまげず戦う勇気を丁寧に描いています。

また、テレビドラマにもなった「池袋ウエストパーク」シリーズは、犯罪や性的問題を描きつつ、現代の格差社会を生きる若者たちへのエールが伝わってきます。

「明日への記憶」で知られる萩原浩が、母子家庭の子ども「自分探しの旅」を描いたのが「四度目の氷河期」。ちょっと変わった男の子ワタルが、自分のルーツは「クロマニオン人」ではないかと考えるようになります。高校生になったころ、母親をがんで亡くし、ロシア行きを思い立ちます。女友達サチとのやりとりも生き生きと描かれており、常識はずれのストーリーなのに自然に読めてしまうお話です。



重松清の「ナイフ」は、いじめをテーマにした短編小説集です。いじめられていることを決して親に言わない、いじめを目撃しても絶対に教師に言わない、という子ども社会のルール、いじめっ子がいじめられる側になったときの意外な弱さ。いじめの加害者・被害者の不思議な心の交流。さまざまなドラマが描かれています。



重いテーマですが、どのお話にも「救い」があり、作者のまなざしの優しさが伝わってきます。